学生の私語騒音防止策論考

How to be Quiet Noisy Students

磯 部 昭 二

Shoji ISOBE

学生の私語による騒音は講義を著しく阻害する。私語騒音は社会問題として新聞雑誌に取り上げられている。教師の講義のやり方によっては私語騒音が減少するので、教師自身の責任も若干あるため、防止策を深く追求しない。しかし最近次第に私語騒音が増大する傾向がある。そこで日頃考え実行して方策を示すのでご批判をお願いします。

私語騒音は自覚の足らぬ学生が、わかろうとしない講義を出席目的で在席するため、退屈から隣の人に話しかけることから始まる。教室の構造、机の配置、出席者の数によってもその騒音値は変る。学生に自覚を持たせるため、訓話をする。その瞬間は静かになるが永続きしない。しかし繰返すことにより、少しずつ向上の気配がある。

There are many students who are whispering in lecture room. They have not strong will for understanding of lecture. And also the noise is depend upon several condition, such as quality of students, room structure, vacant seat ratio, etc. In noisy time, moral discourses are given to noisy students. These are consist of several topics such as former prime minister Tanaka's episode, etc. Sometimes, the noise level go down. As far as our experience, this is a best way to be quiet.

1. はじめに

教室の中で講義を聞きながら隣の人と私語を交わす学生が多い。このため教室が騒々しく、心ある学生は迷惑をしている。教師としても騒音のため気が散り、講義に身が入らなくなる。教師は一生懸命わからせようと努力しているのに、学生はそれにこたえるように講義を理解し、覚えようとしているのか疑問に感じ、元気がなくなり、空しさだけが残ることがよくある。

この現象は私が教師を経験した時よりも激しくなっており、以前より雑誌・新聞などによく話題として取上げられるが、改善のきざしはない。浜の真砂のように尽きることがない。学校としては重大問題のはずなのに何故かその対策が煮え切らない。教師が講義上手なら学生は興味をもって聞くので私語はない、私語を許すのは教師の講義のやり方がまずいためであるといわれそうなので、

教師は自分のいたらなさを指摘されかねない恐れがあるためか、学生の私語対策に本腰が入らないのであろう。

しかしながら学生の私語の習癖は次第に増大している。これは、これまでの家庭や学校の環境、年々厳しくなる受験環境などに遠因があるように思える。例えば、ラジオ・テレビを聞きながら勉強したりする。つまり教師の声はラジオ・テレビ並の雑音と思うようになり、私語を交わしたくなる。また、受験時代には正規の学校の教育だけでは、試験に合格しないと思うためか、家庭教師や塾教室などを重視し、正規の教育は軽んじてしまう。多人数授業では物を覚えず、家庭教師・塾教師の個別の教育でないと、頭に入らぬ癖がついてしまう。大学の講義は多人数で行われるため、正規の授業には身が入らないという昔の癖が出てしまい、つい退屈のため隣人に話かしてしまうのでなかろうか。

大学の講義も新聞・雑誌でかなり手厳しい批判を受け

ている。「同じような話をだらだらして、授業が終っても何の話だったかわからない」「伝達の仕方が下手っぴー」という“ぬるま湯教授”への風当たりが強い⁽¹⁾。

「こんな大学教授はクビにせよ！」という研修用のビデオも売られているそうである。一事が万事で講義はこんなものかと、すべての講義に対しても同じ印象を学生は受けるのかも知れない。

教室の構造や聴講学生の数により、私語騒音の強度は変わるけれども、講義を円滑にするには私語をなくすることが根本対策と思う。私は騒音値が高くなると注意し、例えば、精神を集中しないと講義がわからないという精神訓話をする。これで5分位は騒音値は下がるが、それ以降は騒音値が増す。はえを手で拂っているような印象だ。拂うことをやめると再びはえが集まるのに似ており、空しさを感じる。しかしこの努力を止めたら学生が将来困ると思い、空しい努力かも知れぬと思いながら講義をしている。しかし少しずつであるが改善のきざしがある。本稿はこの努力の一端を述べるが、ご批判をいただきたい。

2. 私語騒音の分析

私語騒音の発生源はもちろん学生であるが、学生の質、教室規模や出席者の数から来る騒音集団の条件により騒音値が変わる。また教師の講義内容、出欠調査の有無、板書の多寡、教科書の有無、マイクの使用などにより騒音強度が変わる。ここでのおのおのについて考えてみたい。

2.1 学生の質

私は専門学校・大学・大学院の授業を受け持っているが、学生の種類によって騒音の発生強度に変化がある。年齢が上るにつれ、また学歴が高度化するにつれ学生の自覚が高まるためか、騒音強度は低下する。おのおのの条件の変化に対する私語騒音の計器による測定値を求め

図1. 学生の質による騒音程度

ることは不可能であるが、筆者の永年の経験では図1.のような関係にあると考えている。ただ大学院生の数が少ないため、この多人数授業の経験はいなが、例えそうであってもこの値の程度におさまると考えている。

ここでいえることは、幼ない学生は私語が多いことである。

2.2 出欠席チェック

出欠席チェックすると、出席点だけを目指す学生も出席する。出席だけを目当てにする学生は、講義の理解は二の次で、ひたすら講義の終るのを待つ。待つ間は私語を交し退屈をまぎらわす。むしろ出欠席をチェックせずにおいた方が、真に講義の勉強を目的とする学生ばかりであるのでやりやすい。

しかし、これでは余りも寂しい限りである。出席を目的とする学生も、出席することにより“門前の小僧習わぬ経を読む”のたとえ通り、講義の一部分でも頭に入れば幸と思う。このような考えに立てば私語騒音に耐えながらも、講義をする意義があると思う。

2.3 教科書使用講義

教科書があると学生は試験の前に勉強すれば、試験に合格するというので、講義は真剣に聞かず、専ら私語騒音を発しふりょう(無聊)を慰めるようだ。受験を目的として勉強して来た学生は、正規の教科書を尊重せず、塾や家庭教師が使う参考書を尊重する傾向にある。本来教科書は大筋をしっかりと見えるように書かれており、教師の話の聞きつつさらに理解を深めるようになっている。参考書は受験目的であって、入試のための珍問・奇問を手早く処理することを目的としているため、微に入り細に入り書かれている。

このような受験勉強をして来た者にとっては、受験時代の参考書のような微に入り、細に入った丁寧な教科書でなくても、教科書なしの講義には耐えられない。一般にはノートはとれずひたすら、ノートがとれる能力の持主のノートのコピーに努力してしまうのではなかろうか？騒音に耐えながらも教科書を使った講義の方が効果が上るのではなかろうか？。

2.4 板書講義

今の学生は言葉をノートする能力に欠けているが、手を動かしていれば、私語ができないという考え方から、黒板の字を書き写させるとすれば、かなり騒音排除に効果があるという考え方がある。ある教師は実行したところ騒音低下に効果があったという。

しかしこれは教師も疲れ、学生も疲れ、書かれた内容

を十分説明することもなく、また説明できても学生は書くことに神経を使っているため、説明を聞く耳を持たぬのではなからうか？。

騒音低減には役立つと思うが、余り感心した講義とは思えない。

2.5 口伝講義

教師は自分のノートを読み上げ、学生に書せるスタイルは、かつては大学講義の主流であった。しかしこれも2.3で述べたように、コピー機により他人のノートのコピーに努力をするようになるのではなからうか？

また、このスタイルの講義の評判は著しく悪く、ぬるま湯教授の講義のパターンになっている。しかし、騒音低減にはある程度効果が期待できる方法と思う。

2.6 マイクの使用

騒音を打消すには、騒音以上の音量を出して、打消す手段がある。マイクの音量をあげ、私語騒音を圧倒する。私語してもマイクの音が強烈で、言葉が相手に伝えられぬようになれば、自然と私語もなくなるはずである。

しかし、生半可な音量では学生は私語騒音の音量をあげ抵抗する。これに負けじと音量をあげあうのでは教育ではない。マイクの使用は必要だが、余りに音量をあげると返って思考力にもぶってしまう。

2.7 教室空席率

教室の席数に比較して学生数が極端に少ないとき、私語する相手も離れておれば、私語したくもできず、静かである。学生数が増すと、私語仲間が近づき私語が始まる。私語をするグループは、4～5人が組になるようである。2人だけだと話が弾まずにいるが、4～5人になると集団が形成され群衆心理が芽生え、大いに私語を堪能するようである。

このような視点から教室空席率と、騒音の関係は大体

図2. 教室の空席率と騒音程度

図2.のようである。2.1にも述べたように計器による測定値を得ることは不可能であるが、筆者の永年の経験から出してみたものである。

騒音低減のため教室の空席率を拡大したのは、学校経営が困難になることははっきりしている。したがって、ある程度の騒音を我慢しつつ、講義をせざるを得ない。

2.8 教室の構造と規模

反響のある教室は騒音が大きい。音響効果のよい教室を作るべきである。また小じんまりしている教室は私語がない。というのは教師との間が余り近づき過ぎて、仲間同志が私語を楽しむ雰囲気にならぬようである。大きな教室で、教師と学生の距離が大きく、隅の方で仲よしグループができるようになると、私語が盛んになる。

前列から学生が着席するようになればよいが、反対に隅の方へ隅の方へと学生は群れたがる。これは一種の現実退避願望であり、志のある者のやることではない。学生に社会人としての認識がでてくれれば解決することではあるが、まだまだ幼ない精神の学生は多い。

長机と長椅子の組合せは悪い。学生同志がいくらかでも接近可能であり、私語の誘惑にかられる。単独の机と椅子の方がよい。

2.9 注意と訓話

私語を無くする最良の方法は、学生が自覚し、私語は恥しいと思うようにすることである。学生に自覚を促すには心にしみる注意と訓話をする事だ。しかしながら聞く耳を持たぬ自覚のない学生は、いくら注意と訓話をして一時的に騒音がへっても、持続する効果は期待することができない。一部の聞く耳を持つ学生が注意と訓話を理解して、講義中は精神を集中しなければならぬという自覚が生まれ、学校に在るうちに基礎的な勉強をしつかりしておかぬと、将来の激しい生存競争に耐えられぬと感ずるようになることである。こうなれば私語はなくなり、しかも一部の自覚なき者の私語に注意をしてくれるようになれば嬉しい限りである。

さて自覚を目ざめさせるにはどうしたらよいのか？。これは繰返し、注意し、今のようなことをしていたのでは、一人前の社会人になれぬということを、徹底的に自覚させることである。私も何度となく自覚をうながすべく注意するのだが、先にも述べたように拂っても拂っても寄って来るはえのように、注意してからちょっと時間がたつと、また私語が始まる。何かむなしい気がしている。

しかしながら自覚を促すための注意や訓話の話し方には工夫があると思う。これを繰返すと少しずつ効果がで

る。私が実施している注意・訓話の内容を次節で述べてみたい。

3. 注意と訓話の一私案

3.1 原価意識

学校の授業料は高価である。また学校は夏休・冬休、入試期間の休など意外に休みが多い。講義期間は年正味6カ月間である。1時間当りはかなりの金額になる。私は映画館での1時間当りの金より高いと計算している。

『学生に映画館に入って私語する人はおるまい、少しでも拂った金に見合うべく映画を見るだろう。学校は映画館より高いのだぞ。自分で金を出してないから、平気で貴重な時間を私語で過ごしている。もったいないと思はないのか?』と話しかける。

学生に原価意識を持たせよというのは無理かも知れぬが、卒業した途端に原価意識のつぼの中にたたき込まれるのだから、今のうちからそのつもりになってもらった方が良く考えている。

この話を聞くと一瞬静かになる。しかし時間がたつと元のままである。騒音の最高潮のとき、この話を繰返す。

3.2 着席順

騒音源は教室の隅である。出入口に近い隅はいつでも教室から退避でき、かつうるさい教師からの距離が大きいので、下宿屋で仲間同志が話し合う雰囲気になるのであろう。私語が甚しいのはここに陣取るグループである。

『歌舞伎座の一番高価な席は、舞台に対し一番前の席だ。後はその2/3くらいになり、立見席(天井桟敷)はさらにその半以下だ。君等は立見席に何故座りたがる?。一番損をしているのだ。前へ出なさい。卒業して会社に入ると、講習会で勉強せよと命令されるようになる。この講習会に出席して帰ると上司から何を覚えたかチェックされる。このために講習会が一番前の列から人が着席する。隅に先に座る人はいない。前へ出なさい』という。

しかしわずかな人数だが真面目な人は移動するが、ほとんどは動かない。

『着席順と勉強の出来方は相関があると広島工大の先生が工業教育誌で発表している。後の席は成績が悪い。前へ来なさい。』ともいうがほとんど動かない。しかし騒音は減り、自覚の芽ばえが見えることがある。

3.3 田中元首相の話

『田中元首相はコンピュータ付ブルドーザといわれるくらい、記憶力がよく、判断が早い。人を引きつける魅力のある人だった。何故記憶力がよく判断力が強いのか?。これは彼の幼い時代に原因がある。小学校から帰

ってきて勉強していると母親から学校にいる中に覚えなくて、何故家で覚えるのか?。学校が一番覚えやすいのではないのか?。しっかり勉強せよと言われた。それ以降学校にいるうちにしっかり覚えるようになった。頭はこのような使えばどんどん良くなるものだ。君達は学校の授業より、塾や家庭教師を重視する癖がついているため、学校の授業を面白く思えないのだ。』という。一瞬は静かになる。繰返すと多少は良くなったかなと感ずる。しかし元首相の話では雲の上の人の話かと思うのかも知れないが、若干の効果はある。

3.4 芸能界

昼のテレビに“笑っていいとも”というバラエティ番組が放送されている。主役はタモリである。彼は時々前席の若い観客が騒いでいると、怒って注意することがある。やはりやりにくいのだろう。

戦後間もなく地方のある都市の音楽会へ出席した時のことである。それは外人バイオリニストの演奏会であった。静かな音楽の中に突然、下駄の音が一瞬響いた。演奏者は怒り演奏を中止し退場した。

江本孟紀という平成4年当選したスポーツ党の人がいる。この人は野球選手や解説をやり人気者である。数年前に福島の成人式に講演に行ったが、会場が強烈な私語騒音に満ちていたため、怒って退場してしまった。

人の目にさらされている人でも、私語騒音やそれに類する音には反応する。ましてや、素人の教師が私語騒音にさらされるときは、その精神的負担は大きい。学生にこのような話をするが、その反応は鈍い。今の学生は人に対する思いやりの気持ちが薄いのであろうか?。

3.5 私語騒音に立向うのは修業である。

新宿駅の雑踏の中で、時々僧がたくはつ(托鉢)しているのを見かける。誰も耳を傾ける人はいないのに、一生懸命説教をする。説教している人は修業目的であるため、誰も聞かなくても満足しているかも知れぬ。しかし一般の人はそれはできないと思う。誰も聞いていないのに話をするのはつらいものだ。話ができず黙ってしまうことになる。

学生が私語に熱中し、講義を聞いていない時、淡々と講義を進めることは、新宿駅雑踏の中の托鉢僧と同じだと思う。この心境を学生に時々語りかけるが、あまり反応はない。以前の学生は耳を傾けてくれたが、今の学生は前項でも触れたよう聞いてくれる人は少なく、人に対する思いやりが無い。これは年々激しくなるし烈な受験

勉強のため、他人に同情する気持ちが育たないのでないかと思う。

3.6 人の話を聞けぬ人はビジネスで成功しない

人の話からの情報は質の高い情報である。人の話に耳を傾け理解しなければ、逆に人の前で自説を説明できない。このことから人の話を聞けぬ人はビジネスで成功しないと話す。

講義は、人の話から情報を得る習慣をつけるにはよい場なのである。これをむずかしいから、退屈だから、話し方が下手だからといって耳をふさぐのは、よい機会を自からの手で放棄するものである。しかし学生はビジネスの経験がないため、遠い宇宙の出来事を聞いているような顔をする。しかしこれを繰り返すと次第に間近にせまるビジネスの世界に目覚めてくれ、静かに講義を聞いてくれるのではないかと期待する。

3.7 話のうまい人は聞き上手

ビジネスに成功した人は話がうまい。人は話により動くので、話のうまい人は人の動かし方が上手である。つまりビジネスに成功する。話のうまい人は必ず聞き上手である。人の話をよく理解することにより、自分の中でそれが血となり肉となるのである。元NHKのアナウンサー酒井弘氏は話をうまくするには、聞き上手が大切⁽²⁾と力説している。この話を学生にしても前項のように学生には実感がわかぬ。やはり繰り返し話し、話が聞けるようにすることだ。

4. 結言

私語騒音を排除する方策や、今考えたり実行していることを思いつくままに書き出してみた。この努力を続けても学生の世界が変わるとは思えない。しかし少しずつ繰り返し対策を実行して、卒業までには少しでも私語を慎む習慣が身についてくれたならと思っている。そのような自覚した学生ができてはいるが、卒業してしまうので、また新しい私語騒音源が入学し悩まされるわけである。浜の真砂のむなしさを覚えるが、教師をしている以上避けて通れぬことと思っている。

しかしながら日本全国の教師が私語騒音公害対策に真剣に取り組むことになり、各教師独自の方法で強力に推進できたら私語の習慣が矯正されるのではなかろうか？。こうすることは、学生が自覚し、思いやりのある、つつましい節度をもった人になり、社会愛の溢れる日本が作られる礎になると信ずる。

参考資料

(1) 朝日新聞：変わる大学 平成4年7月3日朝日新聞記事

(2) 酒井 宏：話し方十話10, 平成4年10月5日, 今週の日本

磯部昭二

昭和26年 東京工業大学電気工学科卒

昭和26年 日立製作所入社, 大型電気機器の設計・開発に従事

昭和45年より東北大学等非常勤講師兼務

昭和57年 工学院大学電気工学科教授